

没者はどのくらいだったのでしょうか。陸・海・官・民の別なくその詳細は果たして、あの混乱の中で、各隊、各自がバラバラだったのですから、良く分からないのでは、と私は今も思うのです。

三ヶ根山には「比島観音」が建立され、多くの人が参拝していますが、ブリス米軍中佐の碑も建っています。日本人を、アメリカ人の輸血によって治療、生還させた人であり、日本の勲章を授与されているのです。

私は、昭和二十年十二月二十三日、マニラを出港、二十一年一月三日復員し、名古屋の昭和区役所へ帰還の申告をしました。

私の海軍戦歴

— 東シナ海漂流記 —

岡山県 武 本 智 弘

私は、空母「雲鷹」便乗時、敵潜水艦の魚雷攻撃を

受け沈没、東シナ海に漂流、幸運にも救助された状況について申し述べたいと思いますが、私の軍歴は主要次のとおりです。

大正九（一九二〇）年

一月二十五日生まれ

昭和十五（一九四〇）年

十二月一日、現役兵として入籍しました。入籍番号は呉・水四四八八〇号で呉鎮守府所属です

昭和十六年

一月十日 呉海兵団入団し海軍四等水兵を命ぜられました

四月十五日 三等水兵を命ぜられ、軍艦「八雲」（元一等巡洋艦）で、古い歴戦の艦でした。海軍は勤務・学校を繰り返して、海軍軍人としての戦闘訓練と、学術・専門技術を学校で学ぶのです

昭和十七年

四月三十日 水雷学校第七十八期普通科水雷術（魚雷）練習生として入校する

五月一日 海軍二等水兵を命ぜられる

九月三十日 水雷学校普通科水雷術（魚雷）練習生

教程卒業 第十九駆逐隊、駆逐艦「綾波」乗組を

命ぜらる。学校佐世保間は隊伍を組んで陸行する

十月三日 「諏訪丸」に便乗しラバウル向け出港す

十月十三日 ラバウル入港、特別根拠地隊仮入隊

十一月一日 昭和十七年勅令第六百一十一号により海

軍上等水兵を命ぜられる（呉鎮守府）

十一月九日 駆逐艦「綾波」へ乗艦、同日ラバウル

出港、第三次ソロモン海戦に参加、配置魚雷発射

機員、二番聯管旋回手

十一月十四日 ガダルカナル、サボ島沖海戦で、魚

雷同時戦により、敵艦四隻を轟沈、大戦果をあげ

たが、自艦も沈没す。夜間二時間漂流後、同隊駆

逐艦「裏波」に救助されトラック島に入港する

十一月二十四日 「伊良湖」に便乗トラック島出港

十二月一日 以上戦務甲、呉海兵団入団臨時勤務

（戦務丁）

十二月二十二日 呉潜水艦基地隊に入隊す

昭和十八年

三月一日 基地隊を退隊、呉―佐世保間隊伍陸行、

巡洋艦最上乘艦する

四月三十日 第一艦隊に編入

五月一日 海軍水兵長を命ぜられる

六月十日 第三艦隊に編入する

十二月一日 兵役法第十九条第一項、第一号の規定

により、昭和十八年十二月一日より当分の間、そ

の服従を延期せしめらる

五月一日―十二月二十一日（戦務甲）

佐世保出港、南洋方面ア号作戦参加、ラバウル島

付近で敵艦載機と対空戦闘となり（敵機二百五十

機）敵機数機撃墜せるも、自艦前部大破する。航

行不能となり、前部錨鎖を後部甲板へ運ぶ、やっ

と艦を前進させ、トラック島にて応急修理し呉軍

港に入港

十二月二十二日―同十九年二月十六日（戦務丁）

最上にて前部右舷他大修理を工具徹夜にて実施

昭和十九年

二月一日 普通善行章一線付与

二月十七日 軍艦最上にて、南太平洋マーシャル諸島方面作戦に参加（戦務甲）

五月一日 任海軍二等兵曹

五月十二日 初任下士官特別教育終了

九月八日 呉海兵団に転勤を命ず 即日退艦「浜風

（駆逐艦）」便乗、昭南廻航、同日第十特根仮入隊

九月十日 第十特根退隊、雲鷹便乗、昭南出港、東

シナ海にて、敵潜水艦魚雷三本が、後部スク

リュウに命中せり（午後十二時）、航行不能とな

る、翌日、午後一時沈没し四時間漂流する。最後

の一人となり奇蹟的に海防艦に救助される

九月十八日 高雄港に夜入港する。海軍集会所入所
する

九月二十七日 退所、基隆に向け陸行、白山丸に便

乗する

十月六日 門司入港、十月六日呉着

（九月八日より十月七日戦務甲）

十月七日 呉海兵団入団臨時勤務

昭和二十年

二月十五日 第一特別基地隊平生突撃隊入隊

三月十日 平生突撃隊（人間魚雷、回天突撃隊）魚

雷に二人乗って体当たりをする兵器、同じことを

している「光突撃隊」に派遣された

四月一日 光突撃隊より平生突撃隊に帰る

五月一日 任海軍一等兵曹

八月七日より（広島原爆のため、魚雷部品全滅）練

習機の戦備をする

九月三十日 任海軍上等兵曹

十月十日 終戦にて退隊、復員帰省す

昭和十九年一月、国防献金を一金参拾円致し、海軍

大臣より表彰状を頂いている。

続いて、東シナ海漂流の状況を話します。

昭和十九年九月、東シナ海に漂流

昭南より高練予定者と共に呉海兵団に行くために私

達十五人は「雲鷹」（商船を改造した一五、〇〇〇ト

ンの航空母艦）に便乗するように乗り組を命じられ

た。便乗者は最下甲板に寝ていた。夜十二時頃、突然

の轟音と共に艦がすごく揺れ、引きずり込まれるようになる。敵潜水艦の魚雷三本が後部スクリューに命中せりと知らされた。しばらくすると熱気が入って来た。急いで必需品を持って上甲板に上がる。

商船改造のため区画が密閉しておらず浸水が速く、乗乗者は移動ポンプで海水を三時間程くみ出していたが、出口からも浸水しだした。急いで飛行甲板に上がる。応急食糧のカンパンを食べていた時、電信兵が無線で高雄に助けを依頼していたのを見た。総員集合の号令が下る。全員飛行甲板に集合する。

副長は「艦は間もなく沈む。総員退去せよ。各々救命胴衣を身につけて本艦の兵はいかだに乗れ」と命じられた。乗乗者十五人は何もないため、前部の方に寄った。艦が少し傾き、ドラム缶がゴロゴロ転がって来た。急いでハンドレールにつかまると、私の後に乗乗者が列をなしてつかまった。

間もなく直立し、轟音と共に後部からあつという間もなく沈んだ。ドラム缶、棒切れ、鉄板等と共に甲板約百メートル程を滑って、私達はなだれのごとく海に

なげ出され海中に沈んだ。浮くまでに多量の海水を飲んで来た。不幸中の幸いと言おうか、私はドラム缶、鉄板等に頭をぶつけることなく、海に落ちた。浮いた時にそばに一メートル程の板切れがあり、それにつかまった。

重油まみれの海水と荒い波のうねりの中を一枚の板切れにつかまって耐えていた。うねりの上に乗った時には遠くまで視界がよく利き、波の底に行った時は小さくなった。黄水を吐き続け、こんなに苦しいものなら、いつそ板切れを放して死んだ方が楽だと思った。

胸のポケットに幼い姪と甥の写真を入れており、波の上に乗った時、もう最期だと思ってその写真を見た。「叔父ちゃん頑張つて」と言う声がするようになった。約四時間漂流していた。うねりの上に乗った時、艦の煙が見えた、いかだの兵が助けに来てくれたと騒ぎ出した。海防艦二隻が近づき、一隻は警戒にぐるりを回っている。いかだの兵から助けられた。うねりの上に乗った時、五百メートル程向こうに艦がいて、皆助けられて、もう私一人のようだ。大きな声で

助けを求めた。

氣付いてくれたのか、艦が近付きロープの先に浮輪をつけて投げた。十メートル程離れている、とっさに板を放して泳ぐべきか、もう一度投げた。くれのを待つべきか……と思うこと数秒、敵潜水艦に見つかれば艦は逃げてしまふ。板切れを放して必死で浮き輪に向けて泳いだ。波が高くなかなか行く事ができない。やっと浮き輪につかまる。ロープを引いてくれ助けられた。

口を拭いて暖かい練乳とウイスキー(氣付けに)を飲ませてもらった。

午後九時頃、台湾の高雄港に入港し、海仁会集会所に泊まった。南京虫の集中に遭い、夜は外に出て芝の上に寝る。この繰り返しだった。サツマイモのつると小麦入りの飯を毎日食べた。後で助かった兵から聞いたのですが、艦が直立した時に飛行デリックが傾いて、多くの兵がその中に吸い込まれたとのこと。

乗員 約一、四〇〇人

救助された人 約 四二〇人 とのことです。

祭文

太平洋戦争から三十六年余、今日、昭和五十六年十一月十四日、帝国海軍駆逐艦綾波生存者有志ここに集い、靖国の御社に鎮まりますと亡きわれらが戦友の御霊の前に、謹んで再会鎮魂の辞を申し上げます。

われら二百六十余人の綾波乗員は、今次大戦勃発以来、共に遠くインド洋に、また南溟の果てに転戦健闘の末、昭和十七年九月より、かの惨烈を極めたガダルカナル戦に投入しました。戦史に詳しい壮絶な一連の戦闘の中にも、十一月十四日展開された第三次ソロモン海戦は日米水上艦船同士の最後のガダルカナル海戦として、夜戦史に輝いています。

第十九駆逐隊綾波は当夜、同隊三番艦として攻撃部隊の最先頭を切り、軍艦サボ島西岸を索敵南下、午後九時、暗夜の中に米新大型戦艦二隻を含む敵大部隊を発見するや、サボ島を利用邁進肉迫し、一艦よくこの六隻に凄絶なる突撃を敢行しました。

全員の精魂こめた正確強烈な十二・七ミリの零距离集中砲撃と、満を持して放った必殺六本の九〇式魚雷

は、まず敵三番艦プレストンを撃沈、次いで一番艦ウォークを轟沈、更にペンナムを大破、後に沈没させ、四番艦グウィン大破戦闘不能と、綾波乗員の一致団結した海軍魂と百戦錬磨の技量は、自らも被弾し燃え盛りながらも、二十五分にして世界海戦史にもまれな大勝利を収めたのです。

敵駆逐隊の集中砲火と、新型戦艦ワシントン、サウスダコタの四十センチ巨砲を一身に受け、戦友は次々と傷つき、朱に染まって斃れ、紅蓮の炎はマストに狂い、燃える鉄の柩となった綾波は、闇のソロモン海を聖火のごとく照らしていました。

全乗員の死力を尽くした綾波の戦闘は終わりました。総員退去した後、歴戦の勇士綾波は、戦友の亡骸を乗せたまま、翌十一月十五日午前0時十分、天も哭け地も動けとばかりに大爆発を起こし、サゴ島の南五千メートルの海底に、静かに永遠のビケットラインに就いたのです。

今、ここに眠る百十八柱の元綾波乗員の英霊よ、戦争は終わりました。広島、長崎に投下された原子爆弾

を契機として、平和と民主主義の名の下に揺れ動きつつ物質的繁栄を保っております。泉下の兄等は果たしてこの状況を何と御覧なられるでしょうか。

われわれは唯ここに聊か綾波奮戦の状を叙し、以てわずかに英霊よ安かれと祈るのみです。呉海軍墓地A地区二十四号の慰霊の碑は、今日も静かに瀬戸内海の見下ろしているはずです。

駆逐艦綾波最後の日、十一月十四日を期して三十九年目の今日、生存者一同新たな悲しみと限りなき懐旧の念の裡に、恭しく慰霊の辞を申し述べる次第です。

昭和五十六年十一月十四日

駆逐艦綾波生存者一同に代わって

元綾波駆逐艦長 佐間 英 迹

一艦よく四艦を肩り、駆逐艦一隻を以て敵戦艦二隻と交戦した当夜の綾波の獅子奮迅の戦闘は、幾多戦記にも登場し、墓碑にも刻まれています。